

学校自慢

マイ・ニシキゴイ・プロジェクト （「自分の鯉」がいる学校）

神崎町立米沢小学校校長 やまうち かずひろ 山内 一浩



1 小さな学校のチャレンジ

本校は、複式学級のある小規模校である。規模は小さいが、地域の学校愛は他のどの学校にも負けないほど強い。「ほんき・やるき・げんき」をキャッチフレーズにして、児童は全力で諸活動に取り組んでいる。

2 マイ・ニシキゴイ・プロジェクト ～一人一匹、ニシキゴイを育てよう～

【鯉がいる生活】昇降口を入ったエントランスに、90cm水槽が6台並んでいる。ここで学年ごとに一人一匹の鯉を育てている。

入学後、新潟県の産地から取り寄せた鯉から自分の鯉を選び、愛着をこめて名前をつける。学級ごとに当番を決め、えさやりをする。鯉の世話は生活に根付いている。ある日、下校しようとしていた児童が「今日、まだ顔を見てなかった」とあわてて水槽に戻るのを見て、取組の浸透を感じた。



生き物なので自分の鯉が死んでしまうこともある。別れに直面し、生命の尊さについて学ぶことも大切と考えている。

卒業時、育ててきた鯉を自宅に持ち帰る児童もいれば、飼えない児童は学校の池に放流する。鯉も新しい環境に進んでいくことを卒業に重ねてシンボリックに行う。

【きっかけ】この企画は平成27年に始まる。愛鯉家の教員が赴任し、このプロジェクトが始まった。単に「鯉のいる学校」ではなく「自分の鯉がいる学校」にしたいとの情熱が原動力となった。

学習指導要領「道徳」の「生命の尊さ」「自然愛護」を根拠に鯉飼育の意義を訴えたと聞く。また、水槽や循環装置等の準備に多方面の方々からの協力をいただいた。

【いつまでも】この企画にこの職員は欠かせない。退職後も鯉を世話し、児童からは「鯉の先生」としても親しまれている。

保護者も来校時には「自分の子供の鯉」に目を細める。初めての来訪者はこの取組に驚いて水槽に見入り、再訪者は飼育が続いていることを喜んでくれる。

この取組から家族ぐるみで鯉の飼育をはじめた家庭が何軒も生まれている。鯉が学校と家庭、そして地域をもつないでいる。

3 町ぐるみの学校支援

神崎町は「発酵の里」をキーワードに精神的にまちづくりが進められ、学校もその中に位置づけていただいている。

「梅干しづくり」は役場の方が学校に出向き指導してくれる。「味噌づくり」は地域の団体が大豆づくりから教えてくれる。名産の「落花生づくり」も役場の方の指導で毎年校内の畑で栽培を教わる。

「農業体験」は田植え・稲刈りに加え、育苗の学習や生育途中の草取りも体験できる。農業士から農業の魅力を教わり、地元への理解を深める機会になっている。



子供が卒業した後もずっと関わっていただける地域ぐるみの温かい応援とその豊かな学びの中で育つ児童が本校の自慢である。